

家なる物は うもの葉?

テーマにそぐわない歌であるかも知れませんが、巻十六にみえる「長忌す
意吉麻呂歌八首」の三首目の「詠荷葉
歌」と題された歌、

蓮葉は かくこそあるもの 意吉麻呂
呂が 家なる物は うもの葉にある
らし (巻十六—三八二六)

を取り上げました。八首の歌はいずれもユーモアを含んでいて、頭の回転の



蓮の葉

速い機知に富んだ作者の人柄を窺わせ

ます。意吉麻呂は、

引馬野に にはふ榛原 入り乱れ

衣にほはせ 旅の印に (巻一—五七)

苦しくも 零り来る雨か 神の埒

狭野の渡に 家もあらなくに

(巻三—二六五)

などよく知られた歌も残しました。人麻呂の後に続く時代の歌人のようです。

蓮の葉は、明るい緑の円形の葉で、

表に茎の付く真ん中から放射状に葉脈

が浮き出た美しい姿をしています。古

代には食事を盛りつける食器として用

いたようです。芋の葉はジャガイモ(安

土桃山時代に伝来) や薩摩芋(江戸時

代中期に普及) のちいさな葉ではなく、

里芋の葉です。里芋は東南アジアのタ

ロ芋の系統で、中秋の名月に供えられ

るように日本でも稲作以前から焼き畑

で作られたとみられるなじみ深い芋で

あったのです。葉は蓮を長く引き伸ば

したような姿です。茎のあたりから上

の短い方に切れ込みがあり、蓮ほど形

はよくはありませんが、身近な葉とし

てやはり食器にも用いられたのでしょ



里芋の葉

う。地域によつてはお盆に墓の供物を盛る器として蓮の葉の代用に用いている所もあります。

意吉麻呂は家で用いているのは、(事実

かどうかはともかくとして) 蓮の葉だ

と思つていたら芋の葉だったんだなあ

と歌うわけです。恐らく招かれた宴の

席の歌で、主人の設えをほめるために

歌つたお上手の歌なのでしょう。さら

に言えば、蓮は恋を連想させるともい

われ(小島憲之氏)、侍っている女性

に家内なんかやつぱり芋の葉なんです

よねえ、などと適当なことを歌いかけ

ているのかもしれない。「万葉集」の

魅力にはこうした歌も収める幅の広さ

もあるといえます。